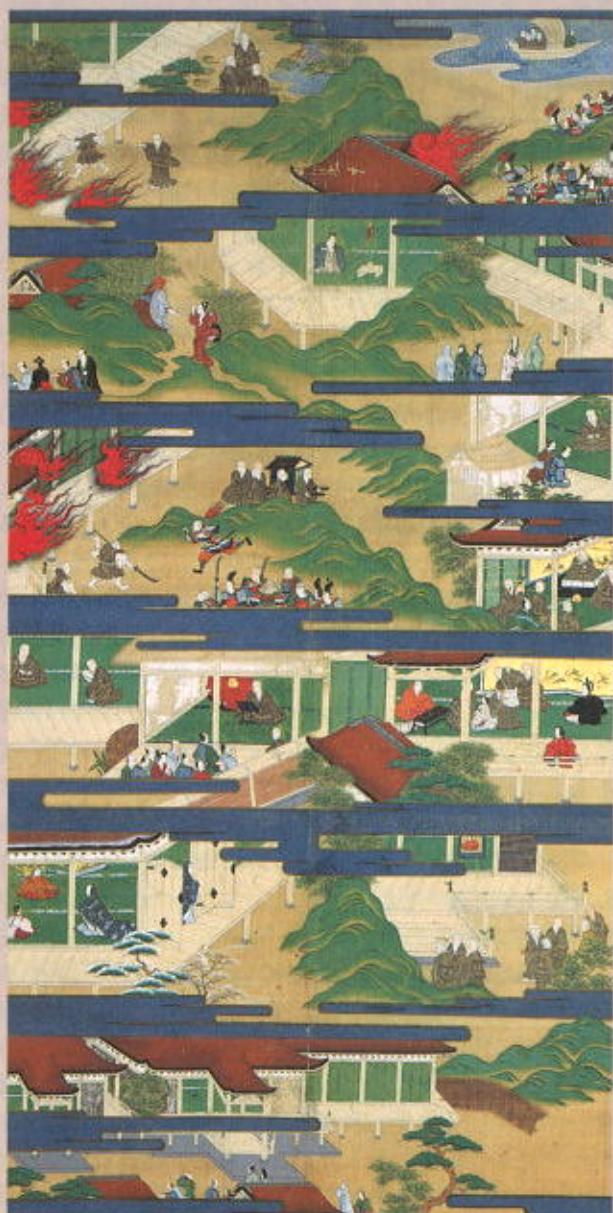


博物館だより



蓮如上人絵伝（富山・光徳寺蔵）

真宗中興の祖・蓮如上人の生涯を越前吉崎における
布教伝説をも交え、約35場面に納められた絵伝。
近世末期頃の作と考えられる。

前田利長公と高岡城築城

—高岡古城公園の歴史散歩—

講師 藤澤 正美 先生

1. 前田家誕生の地

高岡の開祖といわれている前田利長は、永禄5年（1562）1月12日、尾張国愛知郡荒子村で、前田利家の長男として生まれた。荒子は今の名古屋市中川区荒子町で、名古屋駅から地下鉄東山線で20分程南へ下ると高畠駅があり、そこから歩いて5分の所にある。この付近一帯が前田家の領地で、荒子公園がかつての荒子城址といわれ、「前田家誕生の地」の石碑が建っている。近くに観音寺（荒子観音）という名刹があり、前田家についての資料は持っていないが、かなり寄進を受けていたようである。この荒子一帯は、当時は海岸で漁村があり、前田家はこのあたりの漁村を治める頭であったと考えられる。また、荒子城の近くに織田信長が治めていた清州城があり、前田利家は信長に仕えていたので、利長も父の利家と共に清州城へ行くことが多かった。

前田家の出生については、菅原道真の子孫でないかといわれているが、はっきりした根拠はない。ただ伝説的に伝えられている事の一つは、道真が太宰府にいた時、生まれた子供のうちの一人が尾張の國へ移り住み、その子孫が前田氏ではないかということである。もう一つは、能登には天満宮の荘園が多く、天神信仰の根強いところであるので、領民支配のためには、菅原道真の子孫とした方が有効であると考えたのではないか。また、江戸時代に幕府が諸大名の系列をはっきりさせるための資料作りをやっており、その時に、前田家は菅原道真の子孫であると記述した資料が残っている。しかし、当時は清和源氏や桓武平氏の末裔とか、高貴な家柄や勇将の子孫であるとか言って、家柄を権威づける一つの策として、武将たちがよく用いる習わしがあった。前田氏の場合も特になかったので、学問の神様である菅原道真を先祖としたのではないかと考えられる。

2. 前田家の発展

加賀藩初代藩主利家には19人の子供がいたといわれており、その中で男子は6人で、長男利長が二代藩主に、四男利常が三代藩主になっている。そして、利常公は去る6月8日に立派に再興され、落慶法要が行われた瑞龍寺を建立している。二代藩主利長の靈を弔うために建てたといわれており、利常にとては、異母弟である自分を三代藩主にしてくれた利長公に対する感謝の念が、非常に強かったものと考えられる。

さらに、利常の子供の光高は四代藩主に、孫の綱紀は五代藩主になっており、光高の弟利次は富山藩主に、同じく利治は大型寺藩主になっている。また、利常の異母弟の利孝は七日市藩主（今の群馬県富岡市）になつていて

る。利孝は利家の正室松子（芳春院）が人質として江戸へ送られた時、江戸での仕事を立派に取り仕切ったという事で、幕府から認められ、群馬県の七日市藩主として大名の地位につけてもらった。

このようにして、加賀藩の御三家が出来上がったわけで、前田家の繁栄と安定の礎を確立したといえる。

3. 高岡城築城までの利長の歩み

本能寺の変の後、明智光秀を敗った豊臣秀吉は、勢力争いの中心人物柴田勝家を戮ヶ岳の戦いで敗った。その際、利家は秀吉と戦わず、かってのよしみを守ったという事で北陸の地が与えられた。そして、利家は天正11年（1583）に金沢入城を成しとげ、前田家にとっては北陸進出の第一歩となつた。

そして、その翌年になって、尾張の時代から前田家に仕えていた武将奥村永福の居城である能登の末森城へ、佐々成政の大軍が攻めてきた。その時、奥村軍苦戦の急報を受けた利家は直ちに援軍を送り、苦戦ながらも佐々軍を退けた。この末森の戦いは、少數の兵力で勝利を挙げたことで戦術史上有名であると共に、前田家にとっては、越中進出の名譽ある一戦であった。つづいて翌年（1585）、秀吉が越中に成政を攻めた時に従軍し、その功により、成政の旧領砺波・射水・婦負の3郡が与えられた。そこで、利家は利長に3郡を与えたので、利長は天正13年（1585）に守山城へ移ってきた。ここに、前田家の加賀・越中・能登3ヶ国支配の原型ができたことになる。さらに、秀吉に下った佐々成政は、熊本へ転封になったので、越中全部が前田家に任せられることになった。利長にとって越中を治めることになると、守山城では西に寄り過ぎているので、富山へ行くことに決めた。慶長2年（1597）、利長は守山を離れ富山城へ移った。利長在城時代の守山は、城下町として非常に発達していたことが守山村史などにも記述されており、利長が去つてからの守山は、急速にさびれていったといわれている。

ところが、利家が病死する一年前の慶長3年（1598）に、利長は二代藩主として金沢城に入り、慶長10年6月まで務めた。その後、利常が三代藩主についたが、これは、徳川家康の政策が一つの要因と考えられる。このようにして隠居の身となつた利長は、前にいた富山城へ再びやつ



てきた。しかし、慶長14年3月、城下の大火で富山城が焼失し、魚津城へ一時避難したが、もっとしっかりした隠居城を築こうと考え、以前守山城にいた時から金沢にも近く、要害の地として見ていた関野（高岡）を選んだ。早速突貫工事で築城に取りかかり、僅か半年程ででき、慶長14年（1609）9月13日に高岡城入城を果たした。当時の資料が残っていないので、どんな城であったか全く未知の内容だが、ただ土塁や水濠が残っているので、いろいろと想像はされている。

4. 高岡城のつくり

結局、建物も何も残っていないわけで、せいぜい民部の井戸ぐらいである。この博物館のある所は鍛冶丸で、明丸（動物園）、三の丸（体育館）と三つの郭が一直線に並んでいる。また、西側には二の丸と本丸が並んでおり、全体的に郭を二列縱隊に並べることによって本丸を護ろうとした。そして、郭の周りに西外濠（池の端）・樹形濠・南外濠（三の丸）の三つの水濠をめぐらした。ふつう、城は本丸を中心にして、周間に二の丸・三の丸と配置されるが、高岡城の場合は全体の形が矩形で、本丸が直接外部に接している。これは、城の西北部が沿地で、人馬も近付けないといった自然の要害を利用したからである。また、一つの戦術的な意味から、当時は郭を結ぶ橋はなく、七つの土橋によって結ぶとともに、本丸へ向かって少しずつ上り坂をしている。更に、城の弱点となっている南（大手町側）と東（中川側）に、それぞれ、大手門（正面）と搦手門（裏口）を配置し、敵が一気に突破できないよう、二重の門構えをした堅固な樹形門を作っている。樹形というのは、四角形の防壘施設（砦）のことと、城郭づくりにはなくてはならぬ軍事上の拠点である。今も博物館のある一角（鍛冶丸）を「ますがた」と呼んでいる。

5. 城の設計者高山右近

高岡城の縄張り（設計）は、もと高櫻や明石の城主で築城術の名手といわれた高山右近（南坊）によって進められた。右近は天文21年（1552）、摂津の国高山（今の大坂府豊能町）で、高山飛驒守の長男として誕生した。そして、12才で洗礼を受け、「ジェスト」と名付けられた。織田信長に従い、21才の若さで高櫻城主についた右近は、戦国の立派な武将でありながら、キリスト教徒でもあった。高櫻市（大阪府）では、右近を自分たちの町を開いた恩人として、大変尊敬しており、高岡公園には右近の銅像が建てられ、関係資料も多数保存されている。天正13年（1585）には、論功行賞により明石城主になっている。

その後、天文15年（1587）、秀吉のキリスト教禁教令によって追放の身となつたが、前田利家の招きによって加賀藩預かりとなり、金沢に移り住むようになった。現在、古城公園の大手口の所に建っている右近の銅像は、高櫻市のものと同じで、昭和62年に「高山右近顕彰碑」の隣に建てられた。また、同じ銅像がもう一体マニラ湾公園に建っている。右近は、慶長19年（1614）徳川幕府によるキリスト教徒禁教令の発布により、逮捕される身とな

り金沢から京都へ、そして、長崎へと送られ、マニラへ国外追放された。しかし、マニラのキリスト教徒たちが大変尊敬していたといわれている。今、マニラ湾公園に建っている右近像は、金沢のキリスト教徒の人たちと、マニラの人たちが共同で作ったものである。

6. 高岡の城下町としての特長

城のある本丸が一番高い所で、城に続く御旅屋町や末広町にかけての高台には武家屋敷が広がっていた。そして、坂下町を下つて片原町から木舟町・守山町にかけてが次の台地で、町人町がおかれて寺院も配置された。つづいて、一番低い所が川原町あたりで、千保川が流れおり、その向かい側に鎧物の町金屋があった。町並みは京都に似て、碁盤の目のように整えられていた。

寺院の配置については、1477年頃に応仁の乱もほぼ鎮まつたが、その後、1488年には加賀の一一向一揆が、守護の富樫政親を倒して、加賀一国を支配し続けた過去の史実があるので、前田氏も一向宗（淨土真宗）の勢力を警戒し、寺院配置を意図的に行ったものと思われる。旧北陸街道に沿つた北側寺院群と瑞龍寺を含めた南側寺院群には、日蓮宗や曹洞宗を中心とした寺院を配置し、市街地中心部には一向宗寺院をおいて、常に監視の目を光らせたものと思われる。なお、市街地の寺院は、外濠を兼ねた二つの用水（庄方用水・川原用水）に沿つて建てられており、用水も城下防禦線の役割を持っていた。

ところが、利長は高岡に居城すること5年、慶長19年（1614）5月20日病に倒れ、53才でこの世を去つた翌年元和元年（1615）に、徳川幕府が一国一城令を厳しく通達したので、高岡城は廃城となり遂に城の完成を見なかつた。しかし、三代藩主利常は濠・堀を残し、さらに、城下の町民に足留めを厳令、種々の特権を与え商業都市に転換することで城と城下町の実質的価値を温存し、利長の意図を継承した。また、郊外にある寺院を市街地へ呼び寄せ、町の賑わいを図つた。そのため、現在は都市計画によって、また、郊外へ出ている寺院もあるが、各宗門の寺院が入りまじつて分布しているのが現状である。

さらに、高岡城下へ敵が侵入するのを境界で防衛するために、街道をクランク状の曲がり角にし、そこに寺社を配置したり、木戸や石垣を設けたりして、樹形のような役割を持たせた。まず、西の方では千石町から来て横田の有磯神社や、千保川を渡つた川巴良諭訪神社の所、そして、南の方に対しては、京田から寺町を通る所や、瑞龍寺の前あたり、東の方では、定塚町の不動尊のある所、北の方は、向野から大坪町へ来る所などがあげられる。このように、高岡の町全体が大きな城としての構えになつたと考えられる。

（高岡読書史談会会長）

平成8年6月15日（土）開催 博物館講演会より

商都高岡のプロフィール —近世高岡の場合—

講師 米原 寛 先生

1. 特異な商都「高岡」

今、当博物館で開催されている「加越老舗百年展」を見ると、「商い」といいますか、「商売」という言葉からのイメージを越えて、文化的にいろんな物が残されている。いわゆる「商い」一つするにしても、例えば、お菓子であればその型、あるいは、鍛物師ですといろんなスケッチや材料などを生んでいく。高岡では、「商い」といながら、単に物を右から左へ動かすのではなく、職人的ひいては美術工芸的な物を作り販売する。これが高岡の「精神的」な商いです。そういう意味では「商い」というイメージから美的なセンスが、高岡の町の中で伝統的に練られてきた。それが銅器などに代表され、文化庁指定の伝統工芸にも指定されてくる。この背景には当然加賀百万石の藩都であり、美術工芸のメッカであることをみせようとしたこともある。

高岡は、当初城下町としてスタートしながら、利長の死去、そして、一国一城令によって一挙に城下町から商都にかわる。この中で普通の城下町とはきわめてちがった発展を示していく。そういう点では、「特異な商都」「特別の意図をもった商業都市」と位置づけることができる。

2. 「クロスランド高岡」の立地

高岡は、江戸・明治時代を通して、本来は富山県の重要な文化・経済の交流点であったはずです。例えば、「都市のポテンシャルティ」といいますか、一時のエネルギーを考えると、まさに「クロスランド高岡」であったわけです。こうしたポテンシャルティを利長がいち早く見抜き、ここに藩都金沢とはちがった高岡という一つの城下町を形成しようと考えたのです。そして、その視点ははるか越前へ、能登へ、飛騨へ、あるいは越後へという目線の展開にあったわけです。富山に居をすえないで、なぜ高岡にすえたかということ自体が、高岡の立地の重要性を示している。

その一つとして、守山城のあった時代から、特に木材関係あるいは、薪・炭などを一手販売する木町という材木町が、小矢部川沿いに設けられていたことがあげられる。この地は、海と砺波の穀倉地帯を水路で結ぶ、加賀藩の大きな拠点であった。

もう一つは、どうも利長は金沢という都市については、将来の発展を考えると十分に満足していなかったことである。むしろ、城下町としては高岡をすえて、金沢城を越える規模の城と町を計画していたようである。それは、金沢が近世の時代に十二分に適合するには弱い地形であり、甚だ狭隘であった。それで、高岡に進出して、ここ

を加賀藩の中心にするという目標があった。ところが、徳川幕府の一国一城令によって、高岡城が廃城となり、城建設の中途で利長の夢が消えてしまった。しかし、金沢を凌ぐ大きな城下町をイメージして出発しただけに、本来ならそのまま消えてしまうのが他の地域の城下町の例だが、高岡の場合は、むしろ廃城になった後の方がお城を守る意識が強く、こうしたねらいをイメージして高岡の町づくりが行われた。

高岡は、金沢に次ぐ第二の防禦体制として、意図的に意図的に作られていった町である。

3. 城下町づくり

まず城を作るには、いろいろな資材を運ぶ大きなベースキャンプが必要になってくる。そのベースキャンプを木町に求めたわけである。この木町において、石や木材など城を作る資材の舟揚げをする場所としたのです。それで、高岡の町はまず木町から始まったわけで、高岡の運営において、江戸時代を通して小矢部川の水運は大きな意味をもっていた。

次に、街道を整備して川と陸をクロスさせ、流通の拠点にしようとした。それは、金沢から今石動を通って富山の方へむけていた街道を、今の横田町から中島町・旅籠町に通ずる新しいルートに変えた。そして、御馬出町から守山町・木舟町・平米町を通って土器町へ、さらに南へ下がり古定塚へ通ずる街道を新設した。この中島町・旅籠町・御馬出町のあたりは、横の千保川の道と縦の街道とクロスしている。ここで、物資の集散が行われたわけで、いわゆるクロスランドのポイントがここにあつたのである。

それから、寺院などは、最初は城を取り囲むように配置された。まず、土器町から古定塚にかけては、ほぼ日蓮宗と浄土宗の寺を置き、南の方の瑞龍寺付近には、曹洞宗とか真言宗という禅宗や密教の寺を置いた。そして、市街地には浄土真宗の寺を配置した。これは、一向一揆に備えて、金沢城下を作る場合にもやっている事なので、中側に浄土真宗の寺を取り込むことによって、監視するという形を当初とったのである。

町の区割りについては、まず、城を中心に武家町を配置し、一段下がった段丘（片原町より西側）には、一番町・二番町・三番町（町ができた順番）、そして、他所から引越ししてきた守山町や木舟町などの町人町を置いた。

こういう形で近世の城下町は、領主の命によって強制的に作られていくわけで、高岡も商都といながら、実際のベースは城下町そのものだったということである。そこで、高岡の町が商都として生き残ると共に、城を如何に守らせるか、そして、加賀藩の第二の華麗な城下町として、あるいは、砦として最後まで守り通せるか、そのため、この高岡の町を経済都市にすることによって、カモフラージュさせようという発想があった。

4. 廃城後の高岡



廃城の後、寺院を周辺から市街地へ移転させたり、町を新たに移し替えたり、往還道を付け替えたりして、城を如何に目線から離して、カモフラージュするかということに苦心を払っていく。

ところが、城下町に領主とその家臣団がいなければ、消費する者がいなく町は成り立たない。そこで町に賑わいをもたらすために、物資の交流を考えていった。例えば、「布木綿」の産地である砺波や福野地区の生産を、一括して取り扱うという布の集荷や、集散の独占的な権益を与えたり、また、木綿の原料である綿を越中はもとより、加賀・能登あたりの需要を賄うための取扱い場所にしたり、魚・塩の問屋を設けたりした。いわゆる、物資の流通の拠点を高岡に権限集中させることによって、高岡の町は初めて商都としてスタートできた。そして、このような物資を扱う人たちの、消費経済を賄うための店ができる。武家という主のいない高岡だが、主は実は「交流」であり、流通経済を取り仕切る連中を主にすり替えて、彼等の消費生活を支えるための町づくりが始まっていた。こういう町はあまり例がない。

しかし、これだけでは特権者だけが潤って、後は沈滞していくことになるので、もう一つ町が繁栄していくために、農村と結びついた商売が考えられてくる。一つは鍋・釜そして、農具や肥料などを農村に提供すること。二つめは、農村の米の流通の拠点を置くことである。いわゆる、商都という「商い」のベースには、まず米がある、そして、その周辺の農村地帯の農民と結びついて、その上にのっかっていくということになる。

まず米については、登米（廻米）として大阪や江戸へまわす「御蔵米」（藩の収入）と、加賀藩の膨大な武士の給料となる「給人米」に分けられる。給人米の管理は、町の中にある藩指定の「藏宿」が行うと共に、米を売り払ってお金にかえる商売も兼ねた。したがって、武士の必要以外の米は換金のため、切符の形で米商人に売り渡された。米商人はその切符を藏宿に渡して受け取るのが私米で、町方や漁村の人々に食糧として販売された。ともあれ、江戸時代は「米づかい経済」といわれ、その米の動きを采配するのが高岡の米場で、町に繁栄をもたらした。

それから、金屋の鍛物師が農民と結びつき、大きな役割を果たすことになる。農民たちは、値段の高い鉄・鋤などの農具や、鍋・釜・鉢びんなどの生活用具を借りたり

り買ったりする。そのための商売もでき、例えば、貸鍋や貸釜などがけっこう繁盛してくることになる。

この鍛物師職というのは、平安時代以降、鐵製の生活用具を作ってきた人たちをさす。古代から「鉄」といえば特殊な鉱物とされ、誰にでも取扱うことができなく、特定の人のみに許可するという性格のものだった。金屋の鍛物師は、河内國（大阪府）に住んでいた勅許鍛物師の流れをくみ、燈籠献上の勅役をつとめる109の山緒鍛物師の一つと伝えられている。そして、仁安年間（1166～1169）に、藏人所が六條天皇の勅を受けて出した牒（朝廷よりの免許状）を持っており、高岡金屋では「仁安の御綸旨」と呼び、現在まで継承している。この御綸旨を持っているのは、北陸道では高岡金屋だけで、北国筋の頭役として活躍した。また、全国の山緒鍛物師を統括していたのは、京都の真継家で、山緒鍛物師は一代毎に許可を得なければならず、その「真継許状」が今も金屋町にたくさん遺っている。

さらに、江戸時代の中期から次第に水田に魚肥を使うようになり、肥料問屋が農村と結びついていくようになる。また、城端・福光・福野や杉木新町（砺波）などの在郷町から、それぞれの土地の特産物が高岡へ集まり、物資の集散の場となってきた。

5. 高岡商人の経済力増大

次に、これも江戸時代の特異な仕組みの中で生まれてきた高岡の繁栄の要素についてである。それは、街道を通るときには、各藩毎に関所や宿駅があって、荷物なんかは宿駅と宿駅を全部積み変えて、引き継いでいくことになっていた。また、各宿駅には宿馬が置かれ、その飼育費用は全部地元で負担しなければならなかつた。さらに、荷物には全部運賃をかけるのだが、民間と公の運賃にはかなり差があった。したがって、民間の荷物が多ければ潤うが、逆に公の荷物が多いと損をする。高岡などは参勤交代があると、公費の支出がどんどん増え町の財政を圧迫した。そこで、その補填を米場の相場のあがりで埋めていくことになる。

ところが、文政年間に高岡の大火があって、米場が止まった時どうしようもなかった。そこで、当初はなかつた綿場での利益を町へ入れるようになつた。高岡の綿場の繁栄は、木綿の産地として知られた新川郡（新川木綿）を控えていたからである。文政8年（1825）には、加賀藩の熱意もあって、加賀・能登一円の綿の手配を高岡に任せると、高岡独占の時代を迎えた。幕末の高岡に繁栄が戻ってきたのである。

もう一つは、当初は生活用具を提供していた金屋の鍛物師で、ここへ来て急拠美術工芸の分野に道を求めて、いわゆる「高岡の銅器」として、新しい工芸の町に転換していく。この出発点の始まりは、北陸で大きな力を持っていた能登の中居の鍛物師の作った壺釜が厚くて深かつたのが、金屋の鍛物師は薄くて浅い釜を考案し、中居の壺釜と逆転してしまったことにある。また、肥料に使う北海道のニシンをゆでる時のニシン釜も売れ行きがよかつた。

平成9年度 展示紹介

◆企画展「近世の染・織の美」

4月22日（火）～6月15日（日）

高岡御車山を飾る華麗な幔幕や人形の衣装などには、桃山期から江戸期に京都西陣で織られたものや渡来した中国（明代）の織工の指導によって製作されたものなど、非常に貴重なものが数多くあります。

本展は、古代製の収集や高岡御車山幔幕などの近世期織物の復元に成功した京都の川島織物文化館の収蔵品の中より、安土桃山～江戸期の名物製・外国製・小袖・能装束や祇園祭の山鉾等で知られるブリュッセル製のタペストリーほか高岡御車山の染織関連資料を展覧し、近世における染・織の美を紹介するとともに、染織文化の日本への伝播を考えるものです。



楓扇蒙模様小袖 江戸中期（川島織物文化館蔵）

◆平和都市宣言10周年記念

企画展「戦時下の暮らし」

8月19日（火）～10月15日（水）

戦後50年を経て戦争を知らない世代が多くなり、戦時の悲惨な暮らしが次第に風化しつつあります。

高岡市が平和都市を宣言して10周年を迎えたが、この機会に戦時中の各種の生活道具や写真などを展示し、改めて平和な暮らしの尊さを見つめなおすしてみたいものです。



戦時下のカルタ・雑誌など

◆蓮如上人五百回忌記念

「蓮如上人展」

6月28日（土）～7月21日（月・祝）

北陸の地は早くから真宗信仰の盛んな所で、人々の日常生活と深く結びついています。

平成10年は蓮如上人五百回忌の記念の年に当たります。上人は浄土真宗中興の祖といわれ、15世紀、動乱の世に生まれ、衰微していた本願寺教團を最大の信仰集団に発展させました。宗祖・親鸞聖人の教えをわかりやすい文章で門徒たちに書き送り、民衆の中に入って布教に当たるなどの活動で、民衆に生きる活力を与えたからだといわれます。

本展は全国の寺、大学などからの貴重な資料や仏具、聖徳太子像や蓮如上人像、親鸞聖人伝説など多面的に展示して上人の生涯をたどり、その業績と信仰を紹介します。

〈主な出品内容〉

光明本尊（大阪・慧光寺）、親鸞・蓮如連座御影（京都・西法寺）、蓮如上人絵伝（富山・光徳寺）、蓮如上人御影（滋賀・福田寺）、蓮如上人木像（奈良・本善寺）、自筆御文（石川・専光寺）、自筆和歌（大阪・慈願寺）、金泥九字名号（奈良・願行寺）、実如上人御影（大阪・定専坊）、蓮乗御影（石川・本泉寺）、蓮如上人使用念珠（大阪・慧光寺）など



親鸞・蓮如連座御影（部分）
(京都・西法寺蔵)

郷土の歴史資料などの 情報を求めています。

歴史や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解する上での貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・絵画・その他資料などの収集を行い、企画展に生かし皆様に見ていただきたいと思っております。情報がありましたら、是非ご提供をお願いいたします。